

亀山市議会議長 森 美和子 様

## 研 修 報 告 書

会派名	新和会
報告議員名	櫻木 善仁
参加議員名	岡本公秀、櫻木善仁（敬称略）
研修日	令和6年10月9日（水）・10日（木）
研修名、内容等	<p>第19回全国市議会議長会研究フォーラム</p> <p>【基調講演】：「人口減少社会における地域の未来図」が中止となり、菅義偉 第99代内閣総理大臣からのビデオメッセージとなった。</p> <p>【パネルディスカッション】「地方議会の課題と主権者教育」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■コーディネーター 井柳 美紀 氏 [静岡大学人文社会科学部法学科教授]</li> <li>■パネリスト 土山 希美枝 氏 [法政大学法学部教授]</li> </ul> <p>「誰がための主権者教育」か</p> <p>越智 大貴 氏 [一般社団法人 WONDER EDUCATION 代表理事]</p> <p>「若者の政治・社会への意識から考える主権者教育の必要性」</p> <p>渡辺 嘉久 氏 [読売新聞東京本社教育ネットワーク事業局同代表]</p> <p>「取材とデータから見る主権者教育」</p> <p>遠藤 政幸 氏 [盛岡市議会議長]</p> <p>「盛岡市議会の取組み」</p> <p>【課題討議】「主権者教育の取組報告」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■コーディネーター 河村 和徳 氏 [東北大学大学院情報科学研究科准教授]</li> <li>■事例報告者 白鳥 敏明 氏 [伊那市議会前議長]</li> <li>諸岡 覚 氏 [四日市市議会議長（第83代議長）]</li> <li>服部 香代 氏 [山鹿市議会議長]</li> </ul>
備考	<p>参加者 2,412 名 三重県の参加者 73 名（9 市）</p> <p>津市 2、四日市市 15、松阪市 13、桑名市 3、鈴鹿市 11、亀山市 6、いなべ市 12、志摩市 5、伊賀市 4、熊野市 2（参加者名簿より）</p>



	所 感
<p>パネルディスカッション</p>	<p>冒頭、法政大学法学部教授の土山希美枝氏からの「議会が主権者教育をするの？」という言葉は、非常に印象的でした。確かに、議会は本来、教育を担う立場ではありません。教育はすべての子どもに平等に提供されるべきものであり、議会体験は一部の子どもたちに限られる教育である、という指摘には深く納得しました。</p> <p>しかし、議論が進む中で、土山氏は「議会という実践の場を教育の一環として活用することは有益である」と述べられ、その意見には共感しました。若者が必ずしも政治に無関心なわけではなく、むしろ「どうやって政治に関わればいいのか」「どう政治と繋がればいいのか」がわからないだけなのかもしれません。</p> <p>他の3名のパネリストからも同様の意見がありました。議員が学校に出向いて出前授業を行い、子どもたちと直接意見交換をする「学び合う」場を設けることが重要です。議員にとって、子どもたちの生の声を聴くことは最も大切なことであり、その意見や提案が議会を通じて行政に反映されることで、子どもたちは「自分の意見が政治に反映される」という実感を得ることができます。これにより、政治参加の意識が芽生えるのです。単に知識を学問的に得るだけでなく、「自分たちの意見で社会を変えられる」という体験が必要だと強く感じました。</p> <p>亀山市議会で開催された中学生議会での質問や提案を、一般質問に繋げるとは非常に重要です。議員として、子どもたちの意見が実際に反映され、その声が届くように実践していくことが、私たちの大切な役割であると感じています。</p>
<p>課題討議</p>	<p>「主権者教育の取組報告」では、主権者教育の理想と現実のギャップが指摘され、具体的な事例を通じて実践的な取り組みが紹介されています。まず、東北大学大学院情報科学研究科の河村和徳准教授は、主権者教育の現状を以下のようにまとめています。</p> <p>主権者教育の理想は、シチズンシップ教育を基盤に、地域社会の課題を自ら認識し、実践を通じて社会を改善する力を養うことにあります。また、多様な意見が共存する社会において、その多様性を理解することも重要です。しかし、現実には、主権者教育が知識の伝達に偏り、制度の理解が中心となっている点が課題とされています。特に、「正解」を教える傾向が強く、模擬投票に重きを置いた教育が行われている現状が指摘されました。</p> <p>さらに、教育委員会や選挙管理委員会が主体となっているものの、それらの連携が十分でないことも課題として挙げられています。</p> <p>このように、理想と現実の間にはギャップがあり、そのギャップを埋めるためには、より実践的な主権者教育が必要とされています。</p>

また、選挙権年齢の18歳への引き下げに関連して、大人になるプロセスの変化も議論の一つです。主権者教育が十分に行われないうまま大人になり、さらに高学歴化に伴って政治への関心や参加が遅れがちになっているという指摘があります。実際、18歳・19歳の投票率をみると、自宅から通学している学生の投票率が高いことがわかっており、地元にいる間に政治に触れる機会が重要であることが示唆されています。

さらに、選挙とその後の連続性も重要です。選挙で終わるのではなく、選ばれた首長や議員がどのように地方自治体で意思決定をしているかを知ることが、主権者教育の本質であるという考えも示されています。

### 【事例報告】

次に、3つの市から事例が紹介されました。

#### 伊那市の取組：

伊那市では、高校生が議会を傍聴し、意見交換会を実施する活動が行われています。この取組は、平成30年の市議会議員選挙が無投票で行われたことを受け、議員のなり手不足に対する危機感から始まりました。

高校生は議会傍聴後、全議員と少人数のグループで意見交換会を実施し、その結果、子育て環境の改善に関する請願をまとめ、議会に提出することができました。また、通学路の外灯増設に関する要望についても、担当常任委員会と共に現地確認を行い、改善の要望が提出されるなど、具体的な成果が見られました。

#### 四日市市の取組：

四日市市では、議長選挙の公約として始まった出前型意見交換会「ワイ！ワイ！GIKAI」が実施されています。この取り組みは、地域の高校や大学との交流を深めるだけでなく、今年度は商工会議所青年部とも連携し、幅広い社会的ネットワークを構築している点が特徴です。こうした活動を通じて、若者だけでなく地域のビジネスコミュニティとも意見交換を行い、社会全体で協力と関心を高める努力が進められています。

#### 山鹿市の取組：

山鹿市では、議員の仕事に対する関心を高めることを目的に、特に小学校6年生を対象としたシチズンシップ教育を推進しています。10校432名の児童を対象に「なりたい職業ランキング」のトップ10入りを目指す取り組みを行い、議員の仕事への理解と魅力を伝えています。また、出前講座では、絵本『ポリポリ村のみんなしゅしゅぎ』を使用し、選挙の仕組みを体験させることで、子どもたちに投票による未来づくりの重要性を学ばせています。実際の投票箱を使い、投票が自分たちの未来を決めるという実感を持たせる取り組みも実施されています。

主権者教育の実践的な取組として、各市議会が地域の社会的課題に向き合い、具体的な成果を上げている事例が紹介されました。特に、小学生から高校生を対象にした3つの市議会の取組では、議員の仕事への理解が深まり、実際に議員と対話することで、若者にとって刺激的な経験となっているようです。生徒からも「良い経験だった」という感想が寄せられています。

また、出前講座がこれらの成果を引き出したことは明らかで、コーディネーターのまとめでも、議員が議場を離れ地域に出向くことの重要性が強調されました。

若者の政治参加意識を高めるには、議員との交流を増やし、自分の意見が政策に反映される実感を得られる機会を提供することが重要です。さらに、現実の社会問題や将来像を具体的に想像させることで、若者がより真剣に投票行動に取り組むことが期待されます。

しかし、主権者教育には理想と現実の間にギャップがあることも指摘されています。主権者教育は、学校教育だけでなく、学び合いや開かれた議会を通じた情報公開や意見交換、選挙権を持たない若者の意見を聞き、議論することが重要です。さらに、行政機関（教育委員会や選挙管理委員会）が主体的に動かなければ、このような取組は進まないことも理解しました。そのため、議会としては、こうした実践的な取組を積極的に支援することが重要です。

特に伊那市の事例は、行政、議会、学生が連携して進めているモデルとして非常に参考になりました。今後は中学生にも対象を広げ、企業や団体が参加して将来の選択について考える学びの場を提供する予定とのことで、機会があれば視察したいと考えています。